

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第32週（8月5日～8月11日）～2019年 第33週（8月12日～8月18日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～ 咳エチケット、手洗いが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 今後も注意」

第32週、第33週のデータを合わせて報告するが、第33週は医療機関の実務日数が少なく、全体の報告症例数が通常の約1/3程度であった。

第32週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,306例であり、前週比15.7%減である。報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、定点あたり報告数はそれぞれ3.39、2.07、1.48、1.40、1.25であった。

前週比で感染性胃腸炎は4%減、手足口病は40%減、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%増、RSウイルス感染症は23%増、ヘルパンギーナは26%減である。

第33週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は1,185例で、前週比48.6%減であった。

報告数の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、手足口病、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナの順で、それぞれの定点あたり報告数は1.67、1.05、0.98、0.64、0.58である。

前週比で感染性胃腸炎は前週比51%減、RSウイルス感染症は25%減、手足口病は53%減、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は57%減、ヘルパンギーナは53%減であった。今後もRSウイルス感染症の動向に注意が必要である。

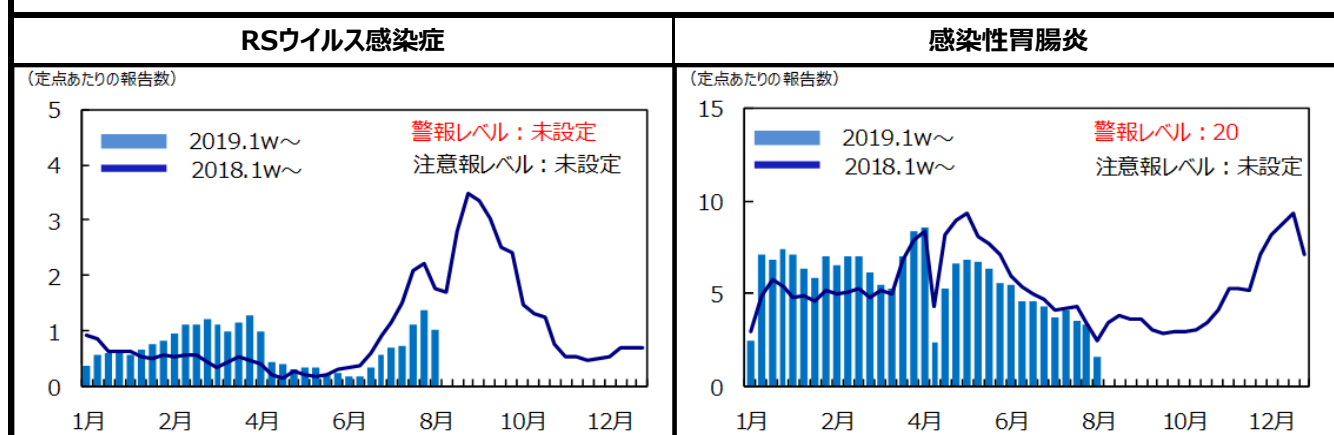


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第33週8月12日～8月18日）

第33週の順位	第32週の順位	感染症	2019年 第33週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第33週の 定点あたり 報告数	2019年第33週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	1.67	51%減	2.48	1歳_15%
2	4	RSウイルス感染症	1.05	25%減	1.76	1歳未満_44%
3	2	手足口病	0.98	53%減	0.67	1歳_28%
4	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.64	57%減	0.73	4歳_14%
5	5	ヘルパンギーナ	0.58	53%減	1.15	1歳_30%

第33週のコメント

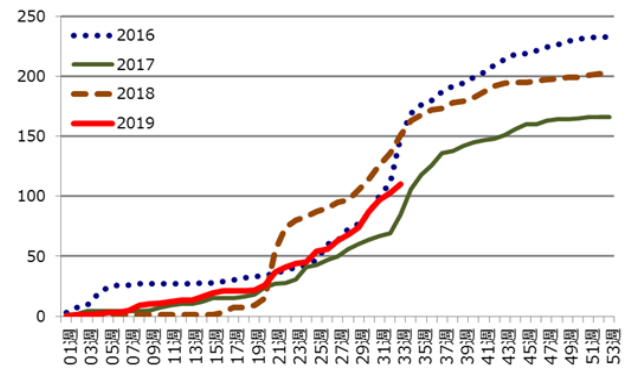
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第33週8月12日～8月18日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています)

	疾患名	報告数	府内市町村別							府内累積報告数	
			豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州		大阪市
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	7	1		1				1	4	110
	腸チフス	1						1			4
4類感染症	チクングニア熱	1							1		2
	レジオネラ症(肺炎型)	2		1					1		67
5類感染症	後天性免疫不全症候群	1								1	77
	侵襲性肺炎球菌感染症	3	1	1				1			186
	梅毒	1						1			667
	百日咳	4			1		1	1		1	589
	風しん	1								1	125
結核 (2019年6月分)	結核 新登録患者数：141名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 50名) (府内累積報告数 842名、内 肺・喀痰塗抹陽性 320名)										

(2019年8月20日 集計分)